槐（かい）

岡井省二創刊

平成27年5月号

平成二十七年四月一日発行　第二十五巻第五号　通巻第二八七号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐安の夢

高橋将夫

雪囲解いて時間を開放す

みちのくの亀と田螺の鳴き交はす

指先に残る記憶や牡丹の芽

鳥雲に入りふるさとに母残る

PDF= 俳誌の salon

古希の背を押してくれるか鰆東風

逆打ちの遍路考妣(こうひ)とすれ違ふ

春光がえぐる大沢崩れかな

ニアミスの凧お互ひを意識せり

良識の人です春田打つてます

やすやすと時流になびく柳かな

蟻穴を出て槐安の夢の跡

PDF= 俳誌の salon

槐安集

水野恒彦

春吹雪嬥歌の山をつつみ降る
涅槃吹波もてあそぶうつせ貝
花種を蒔きて余生を埋めんとす
父の忌や春の銀河の端垂れよ
星空は神代のままに冴え返る

加藤みき

青麦に踏まれたる跡なかりけり
胆つ玉太くゆるりと蜷の道
いくたびもハイを練習入学す
春暁や新車満載疾走す
鱶らにくれなゐのとき来てゐたり

中島陽華

穴太の庄なり臘梅の香高し
声出たり秩父石の辺節分草
花林檎嗅ぐや齢を忘れをり
大川の水減つてをり懐炉抱く
荷を背負ふ歩荷は山へ蕗の薹

竹内悦子

魚の腸洗つてをりぬ石蕗の花
大屋根に寒鴉をる九絵料理
万両や大甕の肌乾きゐて
壺中の天軸と椿と畳かな
真つ新な紙幣と金貨春の鵙

PDF= 俳誌の salon

雨村敏子

林檎剥く地軸の傾ぎ感じつつ
星いろの風呂敷包み冬苺
松籟や荒緒に春の雪のせて
鰭酒の鰭あつあつと運ばるる
糸遊の光掬ひし柄杓かな

本多俊子

何を祈らむ寒三日月真向ひに
きさらぎや何か呼びゐる木偶の貌
神饌やまだ濡れてゐる桜鯛
九十をゆさぶる宙や木の芽道
桜餅夢のごとくに月日すぐ

近藤喜子

歯朶萌ゆる古生代より継ぐ命
ひよめきの柔らかきかな春の雪
翔ちしもの海光となる梅日和
啓蟄や砂文字どこか呪文めく
亀鳴きし夕暮れ星の潤みけり

瀬川公馨

水辺まだ芹を抱へてゐたりけり
三光門あけ放ちたる鬼やらひ
夜をかけて暇乞ひせる零れ梅
春の海にブリキの玩具砂を食む
素つぴんの冬あぢさゐと名告りたる

PDF= 俳誌の salon

久保東海司

枯山にぞくぞく孵る星の数
耕しや牛は気ままに草を食む
百僧の一揆の如き煤払ひ
牡蠣すする余生漸く安泰に
失言の後の木枯振り向かず

柳川晋

豆撒きて悔い改むることもなく
春泥の上に生まれて死ぬ定め
愛想よく流されてゆく雛ばかり
ビッグバン千億年のかひやぐら
逃水の水位高しと注意報

岩下芳子

靴脱いで靴下脱いで冬うらら
美しき数字並べて卒業す
次の波来ぬ間に拾ふ桜貝
標本箱から初蝶の飛び立てり
転がれば影も転がる春疾風

近藤紀子

朝帰りの戀猫視線はづしゐる
青麦を活ける背すぢを伸ばしけり
冬青染の春のショールを結びたり
紅梅の上枝まで子を抱き上ぐる
山茱萸の黄に迎へらる花展かな

PDF= 俳誌の salon

岩月優美子

黄の花の果敢に競ふ余寒かな

浅春の木々沈黙のままなりし

生と死の狭間に張りし薄氷

冴返る参道巫女の足早に

未来図はいつも桃色地虫出づ

竹中一花

肩に乗る柩に春の雪つづく

楼門の中は明るき梅日和

肩車の子の歌声や風光る

ＳＬのなんだ坂土筆野大井町

牛臭き野に光りたる斑雪

PDF= 俳誌の salon

槐市集

有松洋子

春めくや夕べに雨の匂ひして
春兆す水のうつはに光満ち
子守唄雪崩おこさぬやう唄ふ
ポケットのふくらみ春の風と光（かげ）
胸内にすみれほどの神がゐる

犬塚芳子

土塊に平和なひかり春よ立つ
天心に雲はなかりし笹子かな
二月満月空に瑕瑾のなかりけり
さらさらと陽を置きざりに春の雪
天帝や春の一と日を使ひ切る

犬塚李里子

つれづれにペン走り出す兼好忌
古墳寂び春寒の景に嵌りゐて
方舟（はこぶね）に乗りそこねたる春の雲
春月や皓々と地に影生るる
冬薔薇萎えどときめく時のあり

井上静子

風花や五色ありたるランドセル
鮒膾琵琶湖の風と訛かな
薄氷や翁の杖にあそばれし
清明の雨聞いてをる阿弥陀仏
花苺ちよつと得意に伊達眼鏡

PDF= 俳誌の salon

今井充子

早春（若草山焼）の夜空を焦がす火の怒濤
飛鳥の春古代のロマンあらはるる
春の鹿餌売る屋台囲みたる
囀りや赤き実ひとつ見あたらず
塩水の気泡（あぶく）はきたる浅蜊かな

江島照美

建国日医者が決めたよ誕生日
鬼になる父の出番よ節分会
焼く牡蛎の海水飛ばし怒りけり
白魚は美白の極みかもしれぬ
盆梅の腰のひねりの艶めかし

岡田桃子

猫に膝かつて祖父母の温みかな
大根の穴そのままに春光
ブルドーザーの黄色整列春一番
ヘリコプターの救助訓練芽木騒ぐ
とり上げし雛の横笛雛の闇

熊川暁子

雪をんな突然窓を叩きけり
消防車雨水の水で洗はれし
なまこ動く水に寒疣たててをり
寒ざくら子はそれぞれの新戸籍
立春の宙をやぶりて太極拳

後藤マツエ

わが五臓力満ち来る四温晴れ
氷上に光る小悪魔とび跳ねて
梅古木枯れても小鳥幹に寄る
物の怪の争ふ気配寒明くる
抽象画裸婦には見えず囀れり

阪倉孝子

高層の音なき雨やヒヤシンス
屑籠へ色紙あふれ春日差す
梅東風や揺れおさまらぬ弥次郎兵衛
春光の今を消しゆく砂時計
春眠やお伽の国へ途中下車

PDF= 俳誌の salon

槐集

うつくしき女(ひと)美しく寒がりぬ　枚方　熊川　暁子

寒林へムンクの叫び聞きにゆく

神の田の幣の震へも春隣

きさらぎのとほくのもののひかりかな

櫂入れて水すなほなる四温かな

炎とは愛撫にも似て山を焼く　大阪　有松　洋子

火と風を統べる漢の野焼かな

大木の傷より朧生まれり

斧上げる樵にかげろふまとひつく

春浅し片目つぶれし人形抱き

涅槃西風してはならない種明し　江島　照美

氷面鏡夜叉と菩薩に揺れ動く

大阪は手乗り鶯ほんまやねん

流し雛生まれかはりて我がもとに

さより食む海の光の色を食む

高橋将夫選

素晴らしき明日あるごとし春夕焼　岡崎　鈴木　初音

春の色夢も願ひもとき刻む

ぴんとはる山の冷気に初音する

うたごころ春の息吹のコロラトゥーラ

玉の井の濁る予感や涅槃西風

天気図を膝に冬帝居座りぬ　京都　中林　晴雄

鶯笛上手に吹けて飽きにけり

明王の眉根緩びし初音かな

旗竿に黒の段だら建国日

菓子の銘「未開紅」なり二月尽

吹き晴れの遠嶺二月の光かな　岡崎　寺田すず江

春泥の照り翳りして腥し

椿落つ現なりけり白骨を抱く

花種蒔く土に還りし安らぎに

末黒野や萌え立つものを待つばかり

PDF= 俳誌の salon

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

きさらぎのとほくのもののひかりかな　熊川　暁子

平仮名だけの表記で如月のやはらかな光景を余すところなく描写している。「遠くの光」だけで如月を詠む作者の表現力の豊かさに圧倒されるばかりである。

〈うつくしき女美しく寒がりぬ〉の句は美女が寒そうにしている景。その寒がり方がこれまた美しいという。美人は寒がり方まで美しいのだ。「美しく寒がる」は作者ならではの視点。

〈神の田の幣の震へも春隣〉の句の微妙な幣の震えに春の訪れを予感する感性や、〈櫂入れて水すなほなる四温かな〉の句における「水すなほなる」の感性、〈寒林とムンクの叫び聞きにゆく〉に見る「寒林とムンクの叫び」の感覚には他の追随を、許さないものがある。

炎とは愛撫にも似て山を焼く　有松　洋子

山焼きの炎を愛撫の如しと言い切った。意表を突かれながらも、不思議と腑に落ちるのはなぜか。山焼きの炎が舐めた大池からは、やがて新しい命が芽吹く。なるほど、炎の愛撫から大地は芽吹くのだ。

〈火と風を統べる漢の野焼かな〉の句、野焼きにおいて男は、まさに「火と風を統率する」のである。

〈斧上げる樵にかげろふまとひつく〉の句の「斧をかざす樵にまといつくかげろう」の感性はいかにも作者らしい。

さより食む海の光の色を食む　江島　照美

青緑で銀色に光る細長い鱵を口にする様子が「海の光の色を食む」で鮮やかに浮かび上がる。

〈涅槃西風してはならない種明し〉の句、手品に限らずやたらに種明かしをしては、身も蓋もなくなる。句でも舞台裏をさらされて興ざめすることがある。もっとも、仏の世界には全てが真で、「種」などないのだろうが。

〈流し雛生まれかはりて我がもとに〉、心ばえがめでたい。

〈氷面鏡夜叉と菩薩に揺れ動く〉の句、氷面鏡（ひもかがみ）に夜叉のように、時には菩薩のように写る作者の顔が想像されておもしろい。

うたごころ春の息吹のコロラトゥーラ　鈴木　初音

コロラトゥーラはソプラノ独唱などで行なわれる装飾に富んだ技巧的唱法とのこと。八～九九世紀のイタリア歌劇で発達したそうである。心浮き立つ春の息吹がうたごころをかきたてると作者は言う。〈玉の井の濁る予感や涅槃西風〉は、「玉の井が濁る予感」と「涅槃西風」の取り合わせが意味深長。

〈ぴんとはる山の冷気に初音する〉は、「ぴんとはる山の冷気」と「初音」のやわらかさとの対比が鮮やか。

鶯笛上手に吹けて飽きにけり　中林　晴雄

昔、祖母が子育てに難儀している妻に、「手がかかるうちが花よ」と言っていた。何事も懸命にやっている時が花で、上手にできるようになると、情熱が冷めてしまったり、懸命だったその頃が懐かしく思い出されたりする。心の仕組みは実に複雑。

末黒野や萌え立つものを待つばかり　寺田すず江

末黒野から新しい命の芽生えを待つ。まだまだ気持ちの若さを失わない作者の精神の吐露。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon